医療法人社団公佑会広報誌

さくら

No.63 令和２年２月発行

宮崎県えびの市大字大河平 4327-37
TEL 0984−33−2127
URL http://www.kyk.or.jp

年末から年始にかけて公佑会の各施設では、クリスマス忘年会や餅つきなどの行事が行われ、利用者の皆さんや職員共に、楽しい時間を過ごすことができました。

忘年会では、職員や利用者の方々の余興があり、職員の余興にお腹を抱えながら大笑いする姿がありました。利用者さんの余興では、皆さん手拍子をして応援する姿がとても良かったです。また、正月の雰囲気を味わっていただこうと、門松や生け花などを飾らせていただきました。

入所されている方の中には、年末年始に外出や外泊をされ、新年を自宅で過ごされる方もおられました。

お正月には、初詣や正月遊び、新年の抱負の書初めなどを行いました。

公佑会では、多くの方々が、笑顔で元気に過ごせるように職員一同、様々な活動や利用者の皆さんとの関わりを大切に取り組んで行きたいと思います。今年も何卒よろしくお願い申し上げます。

「食事が取れなくなったら」

医療法人社団公佑会　理事長　丹　光明

最近、胃瘻を拒否される家族の方が多くなった。ある国会議員が「胃瘻利用者はエイリアンのようだ」と発言されたのも一因らしい。

高齢になると、いろいろな原因で食事を口から食べることが困難となる。食べ物を飲み込む機能や反射が弱くなり、間違って食物を肺に吸い込んでしまう誤嚥だ。悪化すると三度の食事のたびに肺炎の危険にさらされる。認知症による失認で食事を食事として認識できなくなる場合もある。高齢者は味覚も低下しており、何かわけのわからないものを口に入れられる感覚だろう。体に良いからと青汁を一日三回無理やり飲まされるみたいなことか。また、意欲の低下により食欲が減退する場合がある。高齢者は喪失の連続である。体力、気力、仕事、役割、家族などが徐々に失われて行く。高齢者のうつ病は少なくない病気だ。食事を取る意欲すら減退させ、栄養不足による体力低下をきたし、このことがまた気持ちを衰えさせる。

しかし、無理にでも栄養補給を続けていれば、再び経口摂取される方がいないわけではない。口から栄養が取れなくなった時の対応には、経鼻経管栄養、胃瘻、高カロリー輸液の3つの方法がある。経鼻経管栄養は鼻の穴から胃まで管を通し、栄養液を胃へ注入する方法である。しかし、この方法は使用者に苦痛があり、口腔内の汚れがこの管に付着することで感染の元にもなり得る。気管の入り口の近くを通るので、肺炎を発症する危険性も高まる。

胃瘻も経管栄養の一種だが、お腹から直接胃へ管を通し栄養を入れる方法である。昔は開腹手術で作成していたが、今では内視鏡を使った簡便な方法（PEG）があり、胃瘻造設が一気に増えた。

高カロリー輸液は、点滴で栄養を入れる方法である。しかし、手足から行う一般の点滴の栄養価は低く、栄養補給には不十分だ。栄養補給にはカロリーの高い液が必要であるが、その分濃度が濃くなる。高濃度の液は、細い血管に入れると血管をつぶしてしまう。そのため、投与するには、首や鎖骨の下、または股の付け根から血管に管を入れ、心臓近くの太い血管にチューブの先端を留置しないと投与できない。心臓の入り口近くは、体中の血液が帰ってくる場所であり、濃い液を入れてもすぐに血液で希釈されるからだ。当然、チューブを入れる処置が必要だし、合併症の危険もある。しかし、最も問題なのは厳重なチューブの管理を行う必要があることだ。高カロリー輸液のチューブを挿入中に熱が出たら、原因が何であれ早急にチューブを抜かなければならない。発熱の原因がチューブの細菌感染だと、抜かない限り感染が収まらず、血液中に細菌が増加し敗血症となるからだ。敗血症は生命を脅かす危険な病気だ。また、残念なことに高齢者は発熱することが多い。食事が取れなくなった方に、チューブの重要性を理解し管理をしてもらえるだろうか。高カロリー輸液は、高齢者への長期間の栄養補給には不向きである。

結局、経口以外で高齢者への栄養補給は胃瘻しかない。厳密な管理がいらないからだ。そのまま風呂にはいれるし、経口摂取を少しでも維持したい場合は、普通の食事との併用もできる。

時々、ご家族から胃瘻はしない、だけど点滴ぐらいはしてほしいとの要望が聞かれる。しかし、栄養（特に蛋白質）が減少している状況で、点滴の投与は「むくみ」を増加させる。胃瘻をしないという事は死に直結する。できれば、「むくみ」のない、その人らしい表情のままでお送りしたいと思っている。

「延命治療はしないで」との声もある。しかし、ホスピスを除けば医療は延命治療そのものであり、医療者には医療を中止する判断はできない。本人の意志が強固に「しない」と明示されていれば尊重されるべきであるが、明確な意思の表示がある事は少ない。結局、医療を継続するのか、中止するのかの判断は家族にのしかかる。

胃瘻は優れた医療であるが、個人的には退院を勧めたい。胃瘻もせず、点滴も抜き、住み慣れた家に退院する。家族を含め親しかった人々に囲まれて人生の終末を迎えるのだ。水分も摂取できないので、生命は長くは続かない。本人には最も居たい場所であり、家族には人生最後の時を見守りお世話できたという充足感がある。問題があるとすれば、24時間以内に医師が診察していないと、警察による「検死」が必要になる事か。しかし、「かかりつけ医」の協力さえあれば解決できる。この方法は、どの家族でもできるわけではないが、尊厳死としての選択肢の一つと考えている。

デイケア活動紹介

デイケアでは毎年、畑で野菜を育てていますが、今年は、初めて白菜を育ててみました。初めてでしたが、小ぶりな白菜を収穫することができました。収穫後に白菜を使って2品調理レクリエーションを行いました。一品目は白菜の浅漬け、もう一品は白菜とツナのお好み焼きです。

午前中に白菜を収穫、洗浄して白菜を刻み下準備をしました。午後からは、刻んだ白菜の水けを絞り、ツナや卵を加えお好み焼き粉で混ぜ合わせ、一口大の大きさになるようにホットプレートで焼きました。焼き上がりにソースやマヨネーズ、鰹節、青海苔をふりかけ完成！

一人ひとり役割を依頼すると、手際よく切ったり混ぜたりと作業して下さり、職員は手を出さなくてもよい状況でした。お好み焼きの焼ける匂いに誘われて、普段なかなか調理に関わることの少ない男性の利用者さんも顔をのぞかせる場面がありました。「美味しいね。」「白菜もお好み焼きに出来るんだね。」などの感想も聞かれ大好評でした。

たくさんの利用者の皆さんに手伝って頂き、楽しく活動を行うことができました。

今年も、色々な野菜を育て、収穫を楽しみ、利用者の皆さんと調理活動を行っていきたいと思います。

京町デイサービス活動紹介

京町デイサービスでは、園芸活動で花壇に花を植えたりしていますが、他にも敷地内に畑を作り、野菜を育てています。野菜を育てるにあたり、農業経験のある利用者から土作りや良い苗の見分け方、苗の植え方など基本的なことから教えていただきました。

夏にはキュウリとスイカを栽培し収穫しました。キュウリはネットを立てると、つたを伸ばしぐんぐん成長し多くの実をつけました。スイカもキュウリに負けず成長し、バスケットボールのような大きさの実を五個くらいつけました。

秋にはキュウリを植えていた場所を耕してうねを作り、サツマイモの苗を植えました。サツマイモの収穫は秋晴れの下、利用者のみなさんと一緒に行いました。大きなサツマイモが掘り出される度に歓声があがりました。後日収穫したサツマイモは、芋ご飯にして振舞い、大変好評でした。

現在はエンドウマメを栽培しています。芽を出したばかりなのでこれからの成長が楽しみです。そして収穫の喜びを利用者と一緒に分かち合いたいと思っています。

さくらの杜活動紹介

ケアハウスさくらの杜では、毎週日曜日、14時から1時間ほどホールで入居者のみなさんとカラオケを行っています。

みなさん、毎週楽しみにされており、「矢切の渡し」「二人酒」「星の流れに」「北国の春」「湖畔の宿」や民謡等、様々な名曲を歌ってくださいます。

入居者のみなさんが楽しんでいる姿を見ると職員も嬉しくなります。時には、民謡に合わせて、踊り始める入居者の方もいらっしゃり大盛り上がりの時もあります。

入居されている方からは、「カラオケをすると元気がでます。毎日でもしたいくらいです。」「歌を歌うと若い頃の時の事を思い出すことができます。」などの声が聞かれており、大変、好評です。

みなさん歌うことが大好きなので、気分を変えて、カラオケボックスにでも足を運んでみたいなあと思っています。

入居者のみなさんの楽しみの為に、さくらの杜ではこれからもカラオケを続けていきたいと思います。

老健大会

令和元年11月20日から22日の3日間にかけて、第30回全国介護老人保健施設記念大会が大分県の別府ビーコンプラザで開催されました。

公佑会からは、入所職員で介護福祉士の横山尚聖副主任が演者として、また共同演者として介護福祉士の町浦祐紀副主任が『なじみの関係構築が困難な症例に対する考察』の題で参加し、発表を行いました。

夏頃より発表に向けての準備を始め、発表の前には職員研修の場で予演会として発表練習も行いました。何度も構成を重ね、当日はすばらしい発表となりました。また、他の施設の発表も一部聞くことができ、他の施設の取り組み等を勉強する良い機会となったようです。

老人保健施設においては1年を通すと、このような研修や発表機会がいくつもあります。今後もこのような発表の場に参加し、日頃の業務の見直しや、より良い介護技術の習得に向けて、日々研鑽していきたいと思います。

産業文化祭

第33回田の神さあの里産業文化祭が、えびの市文化センターで11月16日、17日に開催され、それに合わせて各施設で作品出展し、利用者と一緒に見学を行いました。

今回も公佑会各部署の利用者が一生懸命作成した作品が所狭しと飾られました。

出展は、各団体や個人、地域の幼稚園や小学校、高齢者施設等で、文化祭前日に来られていた方々は、どう配置したら作品がより良く来場者の目に映るかを考え協力し合って飾っていました。

当日、会場内は大変な盛り上がりで多くの人が来場されていました。工夫に工夫を重ねたアイデアに満ち溢れた作品が数多くあり、見学に行かれた利用者の方々は、その作品の完成度に驚きと、見る楽しさで自然と笑顔になっていました。

毎年開催される産業文化祭は利用者にとっても職員にとっても刺激になり、次の目標や、やる気に繋がるイベントであると感じました。来年も利用者の方が楽しみながら作成し、納得のいく作品が出展できればと思います。

交流会

職員交流を目的とした公佑会ミニバレー大会が11月に行われ、今年で5回目を迎えました。部署の違い等でなかなか関わる事の少ない職員同士で、チームを組み、プレーを通すことで限られた時間ですが、交流することができます。多くの職員が参加し、珍プレー好プレーも多く、皆が大笑いする姿が見られていました。表彰を兼ねた懇親会ではゲーム等も行われ、和気藹々と親睦を図る事が出来ました。

年末には医療法人社団公佑会と㈱ライフサポート合同での忘年会が行われました。丹理事長の挨拶、川合事務長の乾杯と続き、永年勤続表彰がありました。その後、業務改善案の表彰が行われました。これは、事前に業務に関する改善案をパネル形式で発表し職員が投票、順位を決めるものです。今回の投票総数は6550票でした。その後は、余興や豪華賞品が当たる抽選会が行われ、賑やかで笑い溢れる忘年会でした。来年もワンチームとなり、公佑会をより一層盛り上げていこう！と一本締めでお開きとなりました。

今後も日頃から色々な提案をし、利用者の生活の質の向上や働きやすい職場環境を整え、様々な業務改善案を発表し忘年会を盛り上げ、職員交流にも繋げていけたらと思います。

＊編集後記＊

令和最初の正月、みなさんどのような正月だったでしょうか？

公佑会の各施設でも年末から年始にかけて、利用者の皆さんに喜んで頂ける催しを行ったようでした。

今回の広報誌では年末年始の行事をはじめ、いろいろな活動等を掲載しています。

今年は暖かい冬となっているようですが、インフルエンザなどが流行している状況です。各施設では、発熱や風邪症状等がある方の面会をお断りさせていただいております。感染予防のため行っていますので、ご理解、ご協力の程お願い致します。

広報委員会では、少しでも多くの活動状況などをみなさんにお伝えできればと思い、頑張っています。なお、公佑会のホームページでも、その他の活動等を見ることが出来ますので、そちらも合わせてご覧いただければと思います。今年もよろしくお願い申し上げます。

URL http://www.kyk.or.jp
※Facebookは公佑会のホームページよりお入り下さい。